

発達心理学 再入門

ブレイクスルーを生んだ14の研究

アラン・M・スレーター／ポール・C・クイン 編
加藤弘通／川田 学／伊藤 崇 監訳

発達心理学の形成に貢献し、
今も論文やテキストに引用され続けている重要研究は、
どのように登場し、批判され、
乗り越えられようとしているのか。
私たちの認識を、どのように深め、広げたのか。

誰もが立ち戻って学ぶべき鍵となる研究を精選、その分野の第一人者が
現在の理論的・実証的な見地から解説した新感覚の発達心理学・再入門。

 **Revisiting the Classic Studies**

発達心理学・再入門

ブレークスルーを生んだ14の研究

アラン・M・スレーター／ポール・C・クイン 編
加藤弘通／川田 学／伊藤 崇 監訳

新曜社

Developmental Psychology: Revisiting the Classic Studies

Edited by Alan M. Slater & Paul C. Quinn

Introduction and Editorial Arrangement © Alan M. Slater & Paul C. Quinn 2012

Chapter 1 © Roger Kobak 2012

Chapter 2 © Thomas H. Ollendick,
Thomas M. Sherman, Peter Muris, and
Neville J. King

Chapter 3 © Karen E. Adolph and Kari
S. Kretch 2012

Chapter 4 © David Klahr 2012

Chapter 5 © Alan M. Slater 2012

Chapter 6 © Denis Mareschal and Jordy
Kaufman 2012

Chapter 7 © Kelly McWilliams, Daniel
Bederian-Gardner, Sue D. Hobbs, Sarah
Bakanosky and Gail S. Goodman 2012

Chapter 8 © Wendy Johnson 2012

Chapter 9 © Usha Goswami 2012

Chapter 10 © Coralie Chevallier 2012

Chapter 11 © Gail D. Heyman and Kang
Lee 2012

Chapter 12 © Jennifer E. Lansford 2012

Chapter 13 © Richard N. Aslin 2012

Chapter 14 © Ann S. Masten 2012

First published 2012, All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.

心理学・再入門

シリーズ编者：S・アレクサンダー・ハスラム、アラン・M・スレーター、ジョアンヌ・R・スミス
エクセタ EX4 4QG、エクセタ大学心理学部

「心理学・再入門」シリーズは、心理学のなかでも鍵となる研究によって提起された問題について理解したいと思う学部学生や一般の方々のための新しいテキストである。各巻は12～15の章からなり、それぞれの章は、ある特定の古典的な研究について詳述し、その実証的、理論的影響について解説している。また各章では、その研究が行われて以来の思考と研究の進歩の重要な道筋についても議論されている。各章は、その展開の最先端の研究者によって書かれており、そのため各巻は教師にとっても学生にとっても、私たちが今日知っている心理学という分野を定めている中心となることがらについて多様な視点を探索する素晴らしい資料となっている。

シリーズの他の巻

『社会心理学・再入門』（ジョアンヌ・R・スミス & アレクサンダー・ハスラム）

もし私がさらに少し遠くを見たとするなら、
それは巨人たちの肩の上に立ってのことです。

アイザック・ニュートンの科学上のライバル、ロバート・フックへの手紙中の言葉（1676年2月5日）

目次

■ はじめに — 発達心理学研究の古典から学ぶ 1

- 各章の構成 1
- 本書の目的と構成 2
- 各章の配列 2
- 各章の要約 3
- まとめ 10

1 アタッチメントと早期の社会的剥奪 13

ハーロウのサルの研究再訪

- ハーロウの古典的研究が生まれた背景 13
- ハーロウの研究の概要 — 早期の社会的剥奪が後の発達に及ぼす影響 15
- ハーロウの研究の影響 18
- ハーロウの研究に対する批判 20
- ハーロウの研究はいかに思考を前進させたか、その後思考はいかに発展したか 21
- まとめ 25

2 条件づけられた情動反応 29

ワトソンとレイナーの「アルバート坊や実験」を越えて

- ワトソンとレイナーの古典的研究が生まれた背景 29
- ワトソンとレイナーによる実験の概要 30
- ワトソンとレイナーの実験の影響 32
- 批判 — 別の解釈と知見 33
- まとめ 37

3 崖っぷちの乳児 43

視覚的断崖を越えて

- 背景 43
- 視覚的断崖 44
- 視覚的断崖の影響 46
- 視覚的断崖への批判 56
- まとめ — 視覚的断崖を越えて 59

4 ピアジェ再訪 67 子どもの問題解決能力の研究からの一展望

ピアジェの実証研究 67

子どもの問題解決能力 — ピアジェ派とポストピアジェ派の考え方 71

複数の下位目標がある問題解決のための就学前児の能力に関する研究 77

まとめのコメント 81

5 乳児期における模倣 85 メルツォフとムーア（1977）の研究再訪

メルツォフとムーアの古典的研究が生まれた背景 85

メルツォフとムーアの研究の概要 87

メルツォフとムーアの研究の影響 90

メルツォフとムーアの研究に対する批判 — 別の解釈と知見 92

まとめ — メルツォフとムーアの研究はいかに思考を前進させたか、その後思考はいかに発展したか 94

6 乳児期における対象の永続性 103 ベイラージョンの跳ね橋実験再訪

ベイラージョンの古典的研究が生まれた背景 103

ベイラージョンの研究の概要 104

ベイラージョンの研究の影響 105

ベイラージョンの研究に対する批判 106

研究はいかに前進したか 研究Ⅰ:対象の永続性の神経基礎を理解する 108

研究はいかに前進したか 研究Ⅱ:学習のメカニズムを理解する 111

最後に 116

7 子どもの目撃記憶と被暗示性 121 セシとブルックのレビュー（1993）再訪

背景と概要 121

セシとブルックのレビュー論文の影響とそれに対する批判 126

まとめ 137

8 IQはどれほど上げることができるのか？ 145 ジェンセン（1969）の問いと答えへの最新の展望

ジェンセンの古典的研究が生まれた背景 145

ジェンセンの研究の概要	147
ジェンセンの研究への批判 — ジェンセン論文への反応	151
その後この分野は、どのように変わっていったか	153
まとめ	157

9	読みとつづり ブラッドリーとブライアントの研究再訪	163
----------	-------------------------------------	-----

ブラッドリーとブライアントの古典的研究の概観	163
ブラッドリーとブライアントの古典的研究が生まれた背景	163
ブラッドリーとブライアントの研究の概要	165
ブラッドリーとブライアントの研究の影響	167
ブラッドリーとブライアントの研究に対する批判	171
ブラッドリーとブライアント (1983) 以降の音カテゴリー化理解の進歩	174
まとめ	176

10	心の理論と自閉症 バロン＝コーエンたちのサリーとアン課題を超えて	181
-----------	--	-----

バロン＝コーエンたちの論文が生まれた背景	181
バロン＝コーエンたちの古典論文の概要	182
バロン＝コーエンたちの論文の影響	184
バロン＝コーエンたちの論文に対する批判 — 異なる解釈と知見	186
この論文はいかに思考を前進させたか、その後思考はこの論文を超えていかに発展したか	189
まとめ	195

11	道徳性の発達 コールバーグの段階再訪	201
-----------	------------------------------	-----

コールバーグの古典的研究が生まれた背景	201
コールバーグの研究の概要	202
コールバーグの研究の影響	204
コールバーグの研究への批判 — 別の解釈と知見	205
まとめ — この研究はいかに思考を前進させたか、その後思考はいかに発展したか	206
要約	210

12 攻撃性 215

バンデューラのボボ人形研究を超えて

- バンデューラの古典的研究が生まれた背景 215
- バンデューラの古典的研究の概要 216
- バンデューラの研究の影響 218
- バンデューラの研究への批判——別の解釈と知見 223
- まとめ——バンデューラの研究はいかに思考を前進させたか、その後思考はいかに発展したか 225

13 言語発達 233

エイマスたちによる /ba/ と /pa/ の弁別研究再訪

- エイマスたちの古典的研究が生まれた背景 233
- エイマスたちの研究の概要 236
- エイマスたちの研究の影響 238
- エイマスたちの研究への批判——別の解釈と知見 238
- まとめ——研究はいかに思考を前進させたか、その後思考はいかに発展したか 243

14 子どもにおけるレジリエンス 249

ラターの名著とその後の発展

- ラターの古典的レビューが生まれた背景 249
- ラターのレビューの概要 252
- ラターのレビューの影響 256
- 初期のレジリエンス研究への批判と長引く論争 257
- まとめと今後の展望 260

訳者あとがき 271

人名索引 273

事項索引 276

装幀 = 新曜社デザイン室

はじめに

— 発達心理学研究の古典から学ぶ

アラン・M・スレーター、ポール・C・クイン

発達心理学の長い歴史のなかで、たくさんの論文や本やその一章、モノグラフが書かれてきた。しかしそのなかでも「古典」と認められるのは、ごくわずかではない。古典とは、その学問領域の形成に貢献し、またその発展に大きな影響を与えた研究である。『心理学簡単案内 (Rough Guide to Psychology)』の著者クリスチャン・ジャレットが述べているように、「他の諸科学には基本となる理論があるのに対して、… 心理学の基礎は、理論ではなく、古典的な実験の集積によって打ちたてられている」のである。

当然のことながら、本書に選ばれている研究は、発達心理学のなかで誰もが知っているものであり、今も新たな論文やテキストに引用され続けており、その影響力を失っていないものばかりである。またこれらの研究は、発達心理学の範囲をカバーするように注意深く編者によって選ばれてもいる。もしかすると、他の編者だったら選ばないものも含まれているかもしれないが、その大部分は誰もが選ぶであろう研究であると考えている。

各章の構成

それぞれの章は、古典的な研究、またはレビューの背景の説明から始まる。それによりその古典的研究を歴史的な脈のなかに位置づけ、研究者たちをその研究へと駆り立てた関心や科学的な視点を確認していく。次にその古典的研究の概要を解説し、次いでそれが与えた影響についての議論が続くが、他の研究者にそのアイデアや発見がどのように取り上げられ、それらの諸概念やデータが発達心理学の研究領域にどのような影響を与え、その発展を形づくったかを見ていく。しかしながら、どんなに重要な研究であったとしても、完璧なものはない。したがって、その次のセクションでは、その研究への批判を示し、別の解釈の可能性や知見についても論じる。そして、その研究がどれくらい思索

を深めたのか、そしてさらに重要なことだが、結果的に、その領域がどう前進したのかについて述べて章を締めくくる。

本書の目的と構成

この本には二重の目的がある。まず、古典的な研究がいかに発達心理学という領域の形成に貢献したかを示すことであり、また古典的研究が提起した課題に取り組むことを通して、この領域がいかに進展したのかを示すことである。そのために古典的研究に立ち戻りたいのである。編者はまず古典的な研究を選び、その後でそれぞれの領域で世界を牽引している第一人者に各章の執筆を依頼し、参加を承認していただいた。特にこの巻は、児童心理学や発達心理学の学部学生、あるいは大学院の発達心理学を中心とする入門コースの担当者にも面白いと思ってもらえるだろうと思う。もちろん過去にも古典論文の再録集はあったが、この本がユニークなのは、それぞれを専門とする現在の研究者が、彼らの現在の理論的・実証的な研究の見地から、その領域が古典的研究を超えて、いかに動いてきたかを論じているところにある。こうして私たちの願いは、この本の読み手である学生諸君が、学問の基礎を知るだけでなく、近年研究がどのように進んできたのかを知り、その一部は、古典的研究によって駆動された思索の流れによってもたらされたということを感じていただくことである。

各章の配列

各章の順序は、編者のひとりであるクインが発達心理学コースの上級レベルの大学院生に教える際のトピックの扱い方を反映している。このコースの最初のセクションでは、情動と知覚の発達に、中間のセクションでは認知発達に焦点が当てられる。そして最後のセクションでは、もっと個人差に注目し、知能や道徳性の発達、非定型の発達、言語獲得などのトピックを扱う。とはいえ、いくつかのトピックについては、別のコースでは違ったセクションに置くことも可能だろう。たとえば、言語獲得のトピックは（そして、その始まりが言語知覚のプロセスの中に現れるとする、私たちが選んだ古典論文も）、問題なく発達心理学コースの知覚セクションでも認知発達のセクションでも扱える。したがって、特に各章を順番に読む必要はなく、むしろ、コースの組み立て、あるいは

読者一人ひとりの好みに応じて読んでさしつかえない。

それでは、本のイントロダクションの慣例にしたがって、以下で各章の要約を示そう。

各章の要約

1章は、ハーロウが1950年代から60年代に行った赤ちゃんザルの感情発達と社会的剥奪の影響に関する一連の研究 (Harlow & Harlow, 1962) について、ロジャー・コバックが検討している。赤ちゃんザルは隔離され、極端な社会的剥奪のなかで、2つの代理母と一緒に育てられた。1つは、食餌を与えてくれる針金でできた代理母で、もう1つは、食餌は与えてくれないが、心地よい接触を与えてくれる布製の代理母だった。ハーロウは、サルたちが明らかに布製の代理母にアタッチメントをもつようになり、恐怖を覚えたときにはそれとの接触を求めようとするを見出した。これらの発見は、赤ちゃんと母親の間のアタッチメント形成が、もっぱら母親によって空腹が満たされるというような一次的動因の低減から生じる二次的な副産物ではないことの明らかな証拠であった。ハーロウの見解は、赤ちゃんザルは愛情や「心地よい接触」を求める一次的欲求に動機づけられているというものであった。驚くかもしれないが、当時、保育の「専門家」やそれを職業とする者の多くの見解は、母親や養育者から赤ちゃんや小さな子が長期間引き離されても、情動に重大な影響をもたらすことはほとんど、あるいはまったくないというものであった。(しかし)ハーロウの実験は、実はそうではないことを実証し、ジョン・ボウルヴィやメアリー・エインズワースなどの研究者によって展開されたアタッチメント理論に非常に大きな影響を与えた。ハーロウの仕事は、初期の社会的関係がサルや人間を含む多くの種の生き残りと繁殖に重要な役割を果たしていることに確かな証拠を与えるものであった。また初期の社会性の発達とアタッチメント形成に向けられた研究の時代を拓き、それは「その後の発達研究の主要な焦点であり続けた」のである。

初期の情動的発達は、2章でオレンディックとその同僚たちが解説している、ワトソンとレイナー (Watson & Rayner, 1920) のアルバート坊やへの条件づけで、まさに注目したことである。この実験は、人間の恐怖心が古典的条件づけによって獲得されることを初めて実証するものであった。当時9カ月の乳児であったアルバート (仮名) は条件刺激として白いネズミを見せられつつ、無条

件刺激として大きな音を提示された。すると何回かの試行の後、アルバートはネズミを見ると、恐怖の情動反応が生じるよう条件づけられた。この恐怖反応は、ウサギやイヌ、毛皮のコート、綿毛、マスク、そしてワトソンの髪の毛といった他の刺激にまで般化された。ワトソンとレイナーは、この条件づけられた恐怖反応を軽減する、あるいは取り除くいくつかの方法を提案したが、アルバートが最後のテストがなされた後〔母親と住み込んでいた〕病院を去ったため、それらが行われることはなかった。今日では、倫理的に見て、このような実験は認められるものではないが、「この研究が、今日広く用いられている行動療法、そして認知行動療法の発展に寄与してきたことに疑いはない」。

発達心理学で最も有名な実験器機の1つが、視覚的断崖である。これはエレノア・ギブソン（彼女の友人にはジャッキーとして知られている）とリチャード・ウォークによって開発された。透明なガラスが張られた2つの面があり、（浅いほうの）面にはガラスの下にパターン模様のシートが敷かれていて、丈夫そうな印象を与える。それに対して、もう1つの深い面のほうは、同じパターン模様のシートがガラスの数フィート下の床にしかれており、落下してしまいそうな印象を与える。視覚的断崖というのは、ここからきている（Gibson & Walk, 1960）。カレン・アドルフとカリ・クレッチは、この視覚的断崖の発展とそのさまざまな使用のされ方について、興味深い説明をしている。つまり、もともとは奥行き知覚を検査するために作られたが、白ネズミ、赤ちゃんネズミ、子イヌ、子ネコ、子ウサギ、ヒヨコ、親鶏、子バト、子ヤギ、子ヒツジ、子ブタ、子どものアカゲザル、そして人間の乳幼児を含むたくさんの種に用いられてきた。著者たちはその他たくさんの使われ方について説明し、事実として「市松模様の面に立って断崖の縁越しにのぞき込む乳幼児や動物のイメージは、この領域の象徴となっている」と指摘している。

ジャン・ピアジェ（Piaget, 1962）は、長らく「発達心理学の巨人」（Hunt, 1969）と見なされてきた人物であり、「ピアジェが発達心理学に与えた影響を評価することは、シェークスピアがイギリス文学に与えた影響やアリストテレスが哲学に与えた影響と同じく、測り知ることができない」（Beilin, 1992）と言われてきた。そして「彼はありとあらゆることを調べ、ありとあらゆるケースで興味深い発見をしているように思われる」。彼は数百もの実験という遺産を残し、それらの多くは古典的研究の規範となるものであった。4章でデイビット・クラークは、子どもがハノイの塔として知られている課題を解く様子を調査した研究を取り上げて、ピアジェの研究方法与理論化について解説している。ハノイの塔課題は、垂直に立った3本の棒からなり、そのうちの1つに大きさ

の異なる円盤が下から大きい順に置かれている。そして、小さい円盤の上には、それより大きな円盤を置いてはいけないという条件のもとで、他の棒に円盤を移していくというのが課題である。クラーは、ピアジェの結論と解釈に対してなされた挑戦を例示するため、この課題に関するその後の研究を取り上げ、次のように結論づけている。「彼がその後が続く何千もの認知発達の研究者の進む道を切り開いたことに疑いの余地はない」。

メルツォフとムーア (Meltzoff & Moore, 1977) は、2つの非常にうまく計画され統制された実験によって、新生児が自分の顔を見ることができないにもかかわらず、大人のモデルを見て、その表情を真似ることができるという明確な証拠を最初に示した。この発見から乳幼児の発達の劇的な捉え直しが始まり、それは新生児模倣の性質や特徴について長く続くこととなった研究の始まりを告げるものでもあった。5章では、私たちのひとり (スレーター) が、これらの発見とそれが発達心理学に与えた影響、そして乳幼児の社会性発達と認知発達の理解に与えた影響について解説する。

1985年に、バイラージョン、スペルキ、ワッサーマンが乳幼児の認知発達に大きな影響を与えることになる論文を公刊した。彼らの実験で、赤ちゃんは、「跳ね橋」の正面に置かれるが、それは床と平らな状態から〔向こう側に〕180度回転できる。それから赤ちゃんは堅いブロックを見せられるが、それは跳ね橋の向こうに置かれている。跳ね橋が上がるとブロックは橋に遮られて見えなくなるが、120度までしか回らないので、ブロックが回転を止められているとわかる。もう1つの条件では、跳ね橋は明らかにその堅いブロックを通り抜けて、完全に180度回ってしまう。赤ちゃんは120度回る「可能」なほうよりも、後者の「不可能な」条件のほうをより長く見た。このことから著者たちは、これは赤ちゃんは堅いブロックがその場所にあるため跳ね橋は回ることができないと理解していることの証拠であると考え、対象の永続性——見えないモノも存在し続け、その物理的性質を維持し続ける——が、ピアジェが述べたよりかなり早い、幼児期の初期から存在すると結論づけた。6章では、デニス・マレシャルとジョディ・カウフマンが「跳ね橋研究」とその発見に関する別の解釈について述べ、行動学的な手法によるデータだけでは科学的なコンセンサスを生み出すことはないだろうと指摘している。そして、この論争を解決するために、跳ね橋タイプの課題に伴う神経学的プロセスや対象の永続性の出現を探索する計算モデルについて述べている。

7章では、ゲイル・グッドマンと彼女の共同研究者たちが、セシとブルック (Ceci & Bruck, 1993) のレビューについて解説している。それは子どもの証言

がどの程度信頼できるか、また子どもはどれほど誘導されやすいくに焦点を当てた、子どもの目撃証言に関する研究のレビューである。グッドマンらはまた、最も信頼でき、かつ正確な報告を得るために子どもにどのように質問するのが適切かという問題を提起し、また不適切な面接がもたらす結果の例も示している。この章では、児童虐待の例を取り上げて、心理学者や法律家、児童保護を含むその他の専門職に関係するトピックについても解説している。セシとブルックの論文は、児童虐待に関する「年間最優秀論文」として、アメリカ心理学会の一部門である心理学的社会問題研究学会 (Society for the Psychological Study of Social Issues) からロバート・シン賞を与えられた。グッドマンらはこのレビュー後に行われた研究について述べ、次のように結論づけている。「1993年以降、研究者たちは子どもたちの被暗示性について多くのことを学んだが、実際の法的ケースの複雑さを前にすると、我々はまだ多くのことを学ぶ必要があると思われ知らされるのである」。

アーサー・ジェンセン (Jensen, 1969) は、『ハーバード・エデュケーショナル・レビュー (Harvard Educational Review)』に「知能と学業成績はどこまで引き上げ可能か?」というタイトルの論文を発表した。8章では、ジェンセンの研究と発見について、ウェンディ・ジョンソンが解説している。その原著論文において、ジェンセンは、人種や社会階層による知能の差は遺伝的に決められていると思われると述べ、「アフリカ系アメリカ人とすべての人種における社会経済的地位 (socioeconomic status; SES) の低い子どもたちには、彼らに想定される学習能力の生得的な限界を踏まえた教育プログラムが有効であろうと提案した」。この論文は、今日まで続く論争を巻き起こした。ジェンセンは人種差別主義者であるとして非難され、「殺害予告を受けたり、カリフォルニア大学バークレー校の学生や教職員が彼の研究室前で抗議を繰り広げた」。彼が提起した問題がきわめて重要であったことは明らかだが、おそらくはその政治的、社会的な含意から、ジョンソンは次のように結論づけている。「ジェンセンの結論は、どうひいき目に見ても未成熟なものであったことに疑問の余地はないが、この論文が受けた激しい拒否反応は、光明よりも興奮を生み、さらには、知能や認知能力検査の成績が実際に発達するのか、そしてどの程度までその発達を促進できるのかということを理解する客観的な努力を妨げるように作用してしまった」。

9章では、ウシャ・ゴスワミが、ブラッドリーとブライアンの論文 (Bradley & Bryant, 1983) について解説している。これは音のカテゴリ化と読みの学習の間の因果的なつながりの証拠を示した論文である。彼らは就学前の子ども

に「音韻意識」（語の構成要素である音を検出し操作する能力）に関するテストを行った。たとえば、脚韻を踏まないのはどれか（cot, pot, hat）、頭韻を踏まないのはどれか（hill, pin, pig）を尋ねる。そして、ブラッドリーとブライアンは、そのようなテストに成功することと後の読み書きの学習の間に明確な関連性があることを見出し、読みやつづりの改善には音韻のトレーニングが重要であると報告した。彼らの研究は、学級での実践や家庭や学校の読み書きの環境に対して明確な示唆を与えるもので、その影響はきわめて大きかった。就学前の保育プログラムにおいて、童謡や言語を用いたその他の遊びを用いて子どもの音声への意識を高めることの重要性は、今やあまねく認識されている。ゴスワミはこうコメントして締めくくっている。「さまざまな言語において、音声言語と文字の知識を組み合わせた読みの介入方法が開発され、何千もの子どもたちがよりよい読み手となることを助けた」。

バロン・コーエンとレスリー、フリス（Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985）は、今ではよく知られているサリー・アン課題について報告している。サリーがビー玉をバスケットに入れて、部屋から出る。サリーが部屋にいない間に、アンがそのビー玉をバスケットから出し、箱の中に入れる。だからサリーは、ビー玉の場所が変わるところを見ていない。サリーが再び部屋に戻ってきたとき、実験参加者に「サリーがビー玉を探すのはどこでしょう？」と質問する。サリーはビー玉が依然としてバスケットに入っていると考えるに違いないので、これは誤信念の検査であり、広く心の理論（心の状態を他者に帰属させる能力）の検査であると考えられている。バロン・コーエンらはこの課題を、自閉症、ダウン症、定型発達の3つのグループの子どもたちに行った。その結果は明確で、自閉症児の大部分はこの課題に失敗し（彼らは、サリーは、彼女がビー玉を入れたバスケットでなく、箱の中を探すだろうと述べた）、他の2つのグループの子どもたちは、サリーはバスケットの中を探すだろうと述べた。バロン・コーエンたちの結論は、自閉症の人たちは「心の理論」をもたず、そのことが、彼らの他者とのコミュニケーションにおける問題の多くを説明するというものであった。10章でコラリー・シュヴァリエはこの研究について解説し、現在ではこの古典的論文を越えていかに思考が進んだかを論じている。彼女は1つの別の見解を指摘している。「自閉症はまずもって社会的刺激に志向させる動機づけと実行過程の第一次的な障害により特徴づけられると議論している。この枠組みでは、社会的認知と ToM [心の理論] が苦手なのは、社会的世界に対して注意を向ける時間が少ないことの結果かもしれない」。

コールバーグ（Kohlberg, 1963）の論文は、子どもが通過する道徳的思考の発

達段階の順序を描き出した。コールバーグの方法論は、いち早くこのトピックについて研究したピアジェから強く影響を受けている。ピアジェと同様に、彼は子どもに道徳的な意味をもつ場面、たとえば、妻の命を救うだろう薬を盗むために薬局に押し入ることは正当か等の質問をし、その理由を尋ねた。そしてその後で、子どもたちとその道徳的な推論について議論した。コールバーグは6つの段階を記した。つまり、子どもたちは最も低い段階から始め、発達が進むにつれてその低い段階と置き換わるかたちでより高い段階のレベルへと進む。しかし、最高段階へと至る者はほとんどいない。11章では、ゲイル・ヘイマンとカング・リーが、それらの諸段階について説明している。彼らはコールバーグの貢献を評価するなかで、もっと最近の知見を提示している。それは(罪のない)嘘を言うことが認められるか否かに関して、文化が道徳的推論に、そして、向社会的行動をとる義務があるかないかにも影響する、ということである。彼らは、道徳判断に文脈的、文化的差異があるということは、コールバーグ理論における道徳の普遍性という前提(あらゆる文化において、あらゆる個人が同じ段階を通過するという前提)に異議を唱えるものだと指摘している。またコールバーグの道徳的ジレンマへの個人の反応と実際の道徳的行動の間のつながりを示す証拠はほとんどないことも指摘している。「道徳的な人間になることはどういうことかについての、今ある膨大な理論的、経験な研究のほとんどは、コールバーグの非常に独創的で創造的な研究に刺激を受けたものであった」。そして、研究者たちは、「人はいかにして道徳的な人間になるのか?」という古くからの問いに対する答えを探し続けていると結論づけている。

12章では、ジュニファー・ランズフォードが、1960年代に行われたアルバート・バンデューラの「ボボ人形」の研究(Bandura, Ross, & Ross, 1961)について解説している。これらの研究で子どもたちはおもちゃのある部屋に連れていかれるが、そのおもちゃの1つが空気人形の「ボボ」である。いくつかの条件では、子どもと一緒に部屋にいる大人の実験者が、人形にキックしたり、パンチしたり、木槌で殴ったりと、攻撃的な行動をとった。その後のテストで、攻撃的な大人を見せられた子どもは、そうでない子どもと比べ、ボボ人形により攻撃的に振る舞った。ボボ人形研究の影響は、広かつ長期間にわたるもので、子どもが強化(あるいは罰)なしに模倣を通して攻撃行動を学習することが可能であることを明確に実証するものであった。また模倣を通して子どもが学習するという考えは今日では当然のこととして受け入れられているが(模倣については5章も参照)、1960年代ではそうではなかったのである。結論として、ランズフォードはこう述べている。「人が他者を観察し、模倣し、モデルとす

ることによって学習するということの理解こそが、バンデューラの初期のボボ人形研究の朽ちることのない貢献なのである」。

13章でリチャード・アスリンはまず、「赤ちゃんは生後12カ月のうちに初語を口に出し始め、まだヨチヨチ歩きでも36カ月までの間に数千もの単語を学んでしまい、しかも母語の込み入った文法の多くも習得してしまう」と述べ、いかにしてそのような複雑なシステムを獲得することが可能なのだろうかと問う。「乳児は初語を口に出すより前に、その母語について多くを獲得している、ということがその問いへの部分的な解答である」。エイズリンはエイマスたち (Eimas, Siqueland, Jusczyk, & Vigorito, 1971) が行った重要な研究について述べ、その研究では条件づけの手続きを用いて、生後1カ月の乳児でも /ba/ と /pa/ の音声を弁別できること、この弁別はカテゴリー分けによること、つまり、乳児は、物理的には互いに異なるが同じ音声カテゴリーに属する2つの音 (たとえば2つの異なる /ba/ という音) は弁別しないのに対して、異なる音声カテゴリーに属する2つの音 (たとえば /ba/ 対 /pa/) は弁別できることを実証した。エイマスたちの研究は、赤ちゃんが音声知覚に関して優れた能力をもっていることを示す莫大な研究の端緒を開くものであった。エイズリンは次のように結論づけている。

エイマスら (1971) の論文は、ごく幼い乳児の微妙な音韻的差異を弁別する聴覚システムがいかに精密かを記述した画期的なものであった。しかしより重要なのは、乳児がこうした知覚スキルを獲得したのは、出生後の学習経験からではなく、5万年前から音声運動メカニズムを通してコミュニケーションをし始めた私たち人間の祖先から受け継いだ淘汰圧によるものかもしれない可能性をこの研究が提起したことである。

子どもたちはいかにして逆境に対処するようになり、またなぜある子どもたちは他の子どもたちに比べて、これをよりうまく行うのだろうか。ストレスのネガティブな影響から子どもたちを守る要因は何だろうか。これが最終章で問題とされる2つの疑問である。アン・マステン、マイケル・ラター (Rutter, 1987) による、古典的かつ非常に大きな影響を与えたレジリエンスに関するレビューについて解説している。普通、人はレジリエンスを中核的な特性として考えたがるが、ラターの論文に関するマステンの記述を読めば、レジリエンスはもっと複雑な構成物であることがわかるだろう。つまり、もともとはラターによって着想され、その後、その領域の専門家たちによって記述されてきたよ

うに、レジリエンスは、個人的な要因（健康な脳、良好な認知機能、自己統制力）や関係性の要因（安全なアタッチメント、養育の質）、環境要因（学校や近隣の環境、チャレンジし、それをこなす経験）を含む力動的なシステムとして出現してくる特性なのである。マステンが書いているように、「レジリエンスは人の『中に』あるのではない。それは細胞から社会的なものまで、人間の機能の複数レベルにまたがる相互作用の過程から生じる」。ラターの古典的なレビュー以来、予防介入プログラムの開発やエビジェネティクスという新たな分野によって研究されている遺伝子と環境の相互作用など、レジリエンスの研究領域が多様な異なる方向性へと進んだことがこの章から理解できるだろう。

まとめ

本書の著者の多くが、各章を書くことが楽しかったと話している。そして我々もまた、それらを読むのがとても楽しかった。きっとあなたもそうだろうと思っている。もっと言うなら、各々の専門領域の鍵となる「思想的リーダー」によって書かれたそれぞれの章が、（その領域のパイオニア的研究者や理論家によって切り開かれた）学術領域の出発点と現在の方向性、そしてそれらの間の相互のつながりの理解を深める一助となることを望んでいる。

謝辞

本章の準備、そして本書全体の編集に、アメリカ国立衛生研究所助成金 HD-46526 の支援を受けた。また、B・P・アカーマンの助言に感謝します。

■引用文献

- Baillargeon, R., Spelke, E. S., & Wasserman, S. (1985). Object permanence in 5-month-old infants. *Cognition*, 20, 19–208.
- Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. (1961). Transmission of aggression through imitation of aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 575–582.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a theory of mind? *Cognition*, 21, 37–46.

- Beilin, H. (1992). Piaget's enduring contribution to developmental psychology. *Developmental Psychology, 28*, 191-204.
- Bradley, L., & Bryant, P. E. (1983). Categorizing sounds and learning to read - A causal connection. *Nature, 301*, 419-421.
- Ceci, S. J., & Bruck, M. (1993). Suggestibility of the child witness - A historical review and synthesis. *Psychological Bulletin, 113*, 403-439.
- Eimas, P. D., Siqueland, E. R., Jusczyk, P., & Vigorito, J. (1971). Speech perception in infants. *Science, 171*, 303-306.
- Gibson, E. J., & Walk, R. D. (1960). The visual cliff. *Scientific American, 202*, 64-72.
- Harlow, H., & Harlow, M. K. (1962). Social deprivation in monkeys. *Scientific American, 207*, 136-146.
- Hunt, J. M. (1969). The impact and limitations of the giant of developmental psychology. In D. Elkind & J. H. Flavell (Eds.), *Studies in cognitive development: Essays in honor of Jean Piaget* (pp.3-66). New York: Oxford University Press.
- Jarrett, C. (2008). Foundations of sand? *The Psychologist, 21*, 756-759.
- Jensen, A. (1969). How much can we boost IQ and scholastic achievement? *Harvard Educational Review, 39*, 1-123.
- Kohlberg, L. (1963). Development of children's orientations toward a moral order. 1. Sequence in development of moral thought. *Vita Humana, 6*, 11-33.
- Masten, A. S. (2011). Resilience in children threatened by extreme adversity: Frameworks for research, practice, and translational synergy. *Development and Psychopathology, 23*, 141-154.
- Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science, 198*, 75-78.
- Piaget, J. (1962). The stages of the intellectual development of the child. *Bulletin of the Menninger Clinic, 26*, 120-128.
- Rutter, M. (1987). Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry, 57*, 316-331.
- Watson, J. B., & Rayner, R. (1920). Conditioned emotional reactions. *Journal of Experimental Psychology, 3*, 1-14.